

Shine

匠.

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めたら、見知らぬ場所にいた。そこにある唯一のヒント「Shine」の意味
とは――

クトゥルフ神話TRPGをリスペクトした短編となっていますが邪神やそれに類す
るものは一切出て来ません。

S
h
i
n
e

目

次

Shine

「ここは……？」

気が付いたら全く知らない場所にいた。少なくとも自分の記憶の中には窓も扉もない真っ白な空間なんてなかつた。唯一あるものと言えば鍵付きの棚がくつづいた机位のもので、何をすればいいのだろうか。

そう思い机をよく調べてみると棚の影に隠されたように紙が隠されていた。二つ折りの紙を開くとこう書かれていた。

Shine

一つの単語だけ妙に鏽び臭い顔料で書かれた紙はそれ以外には何も書かれておらず、

裏ももちろん無地だ。

Shine……確かに輝きみたいな意味だつたはずだが明かりもないこの部屋じや何の意味もない。

…………ん？　いや待て、それだとおかしい。明かり、光源がないというならなんでこんなにも明瞭に部屋の様子を見ることが出来る？　なんで自分に影が出来ていてる？　つまりどこかに照明器具があるんじゃない？　それを探すには……影の間逆の方向を探せばあるはずだ。

まるで誘蛾灯に引き寄せられる虫のように歩いていくと、壁に埋め込まれるように、かつ目立たないように付いた照明の近くを探してみると壁と床の境目に小さな白い鍵が安置されている。

丁度棚の鍵を開けることが出来そうだ。そう思い、机の元に戻る。と言つても数歩歩いてただけで元通りの位置に戻るが。

鍵付きの棚は一番上と真ん中の引き出しは辛うじてハードカバーの若干厚い本に入るほどの高さであり、一番下の棚が一番上と真ん中の大体四倍ほどの高さになつている。

しかし一番下の棚は6桁の数字を当てはめるダイヤル式、真ん中の棚は物をはめて回さなければならぬ形式なので必然一番上の棚に鍵を差し込むことになり、鍵はすんな

り入り込んで捻ると力チャヤリと小気味のいい音を響かせる。

中には灰色の小箱が置いてあつた。小箱に鍵はついておらず、開けようとすれば抵抗も無く開いた。小箱は指輪入れであつたようで星形になるように研磨された透明な石が鎮座する白みがかつた金色の指輪が石が目立つよう置かれていた。

指輪を手に取つてみると光をいろいろな方向に反射しているのかキラキラと輝いて

いる。壊れないように慎重に真ん中の棚の窪みに嵌める。

がつちり嵌まり、右に捻ると金属音がして手前に引けるようになった。

中には真っ黒な装丁の施された本と、その上に乗せられた紙がある。紙には

P 97, 13

P 121, 5

P 11, 8

P 25, 20

P 56, 17

P 222, 7

と書かれている。これは、本に乗せられていた紙でPと付いているのなら本と関係な

いことは無いだろう、ひとまずこのページを開いてみるか。

97ページの13行目の……文末かな……？『う』、でも数字が当てはまらないな。文頭ならどうだ。『枝』えだ……？いや、しか。最初は4。

121ページの5行目は『氏』は、またしで4。

11ページの8行目は『無』は、な？む？7か6、保留。

25ページの20行目は『胃』でい、つまり1。

56ページの17行目は『露』でろ、6か。

222ページの7行目は『火』で……ひ、1だな。

ダイヤルには447161とするが聞く気配はない。なら446161ならどうだ。棚はあつさりと鍵の開く音を響かせる。これでどうにかなるのかと安堵しながら開けるが、中に物は何もなかつた。

『S』『h』『i』『n』『e』の文字を象つた血が溢れ出す。

血は瞬く間に自分の顔にめがけて登つてくる。引きはがそうともがくが手で退けようとしてもすり抜けてしまい、何の効果もない。血は顔を覆いつくし、気管の方に入る。

「^死^ねSin^e」

『N県U市の市街地にて成人男性の変死体が発見されました。男性の周りには水場や飲料などは無かつたのにもかかわらず溺死していたことから警察は事件性があるとして捜査しています。現場には英語でSin^eと書かれた紙が落ちており、目撃者の捜索も行っています。続いて、本日のお天気ですが』』